

第35回夏期福音特別集会(4)

愛なるキリスト——ヨハネ伝第15章1～27節

1988年8月21日

小池辰雄

天愛 葡萄の樹の根幹 エン・クリスト 多くの果を結ぶべし わが愛に居れ 愛の極みは十字架 棄身の愛 我を見し者はキリストを見しなり 御霊の愛 キリスト直結 棄身の愛 詩「エン・クリスト」 共歓同苦 今日汝は我と偕にパラダイス 祈り

【ヨハネ15・1～27】

1 我は真の葡萄の樹、わが父は農夫なり。2 おおよそ我にありて果を結ばぬ枝は、父これを除き、果を結ぶものは、いよいよ果を結ばせん為に之を潔めたもう。3 汝らは既に潔し、わが語りたる言に因りてなり。4 我に居れ、さらば我なんじらに居らん。枝もし樹に居らずば、自ら果を結ぶこと能わぬごとく、汝らも我に居らずばまた然り。5 我は葡萄の樹、なんじらは枝なり。人もし我におり、我また彼におらば、多くの果を結ぶべし。汝ら我を離るれば、何事も為し能わず。6 人もし我に居らずば、枝のごとく外に棄てられて枯る、人々これを集め火に投入れて焼くなり。7 汝らもし我に居り、わが言なんじらに居らば、何にても望に随いて求めよ、然らば成らん。8 なんじら多くの果を結ばば、わが父は栄光を受け給うべし、而して汝等わが弟子とならん。9 父の我を愛し給いしごとく、我も汝らを愛したり、わが愛に居れ。10 なんじら若し、わが誠命をまもらば、我が愛におらん、我わが父の誠命を守りて、その愛に居るがごとし。11 我これらの事を語りたるは、わが喜悦の汝らに在り、かつ汝らの喜悦の満たされん為なり。12 わが誠命は是なり、わが汝らを愛せしごとく互に相愛せよ。13 人その友のために己の生命を棄つる、之より大なる愛はなし。14 汝等もし我が命ずる事をおこなわば、我が友なり。15 今よりのち我なんじらを僕といわず、僕は主人のなす事を知らざるなり。我なんじらを友と呼べり、我が父に聴きし凡てのことを汝らに知らせたればなり。16 汝ら我を選びしにあらず、我なんじらを選べり。而して汝らの往きて果を結び、且その果の残らんために、又おおよそ我が名によりて父に求むるものを、父の賜わんために汝らを立てたり。17 これらの事を命ずるは、汝らの互に相愛せん為なり。18 世もし汝らを憎まば、汝等より先に我を憎みたることを知れ。19 汝等もし世のものならば、世は己がものを愛するならん。汝らは世のもの



ならず、我なんじらを世より選びたり。この故に世は汝らを憎む。²⁰わが汝らに「僕はその主人より大ならず」と告げし言をおぼえよ。人もし我を責めしならば、汝等をも責め、わが言を守りしならば、汝らの言をも守らん。²¹すべて此等のことを我が名の故に汝らに為さん、それは我を遣し給いし者を知らぬに因る。²²われ来りて語らざりしならば、彼ら罪なかりしならん。されど今はその罪いいのがるべきさまなし。²³我を憎むものは我が父をも憎むなり。²⁴我もし誰もいまだ行わぬ事を彼らの中に行わざりしならば、彼ら罪なかりしならん。然れど今ははや我をも我が父をも見たり、また憎みたり。²⁵これは彼らの律法に「ひとびと故なくして、我を憎めり」と録したる言の成就せん為なり。²⁶父の許より我が遣さんとする助主、即ち父より出づる真理の御霊のきたらんとき、我につきて証せん。²⁷汝等もまた初より我とともに在りたれば証するなり。^{あかし}

●天愛

夏の特別集会では、創世紀から黙示録までの大事なところに、この35回でおよそ触れたと言つて過言でないと思います。しかも、聖書中の聖書は何といつても福音書です。マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの、それぞれ言葉、行為、心、霊と、この四つの特徴を持った福音書。そしてこれが渾然一つであるところの福音書ヨハネ伝に来て、本当にカイロスが来た。私の個人的な願いと、それから、導かれたこの事とがピタリ一つになって、天的必然によつてこの35回をもつて終わることにされたわけです。

35はその反対の53の土台によつて起きたところの現象です。イザヤ書の53章と35章とは離す事のできない関係にあります。十字架のキリストの預言（53章）と、新天新地をもたらす大希望の預言（35章）。しかも、キリストは地上においてその35章を身をもつて証しされた。そういう福音書の最後に来たわけです。もう、何と言つていいか分からない。本当に神さまのお導きでした。

今日は、「愛なるキリスト」という題で、これは最高の題になった。私は、このキリストの天の愛で愛されているから、号に「天愛」と書きました。

●葡萄の樹の根幹

では、15章を少し読みながら行きます。

「^{まこと}^{ぶどう}我は眞の葡萄の樹、わが父は農夫なり。

私たちが自然界で見ている葡萄の樹、イスラエルにたくさんあります。その葡萄の樹をご覧になって、

「私が本当の樹だ。あの葡萄の樹は私の徴だ」



というわけです。

「過ぎ行くものは過ぎ行かざるものの徴である」

とは、ゲーテの『ファウスト』の最後に出てくる言葉ですが。「葡萄の樹」とおっしゃったそのキリストはもちろん根っこから、幹、枝、葉、花、実、全部がキリストです。全部つながっている。キリストの生命がその末まで行つて、そして、実が稔る。根幹という言葉が日本語にあります。正に根が一番大事な所です。少し分析して言えば、根が宗教の世界、幹が道徳の世界、それから枝葉花果は文化文明の世界です。私は樹を見てそのことを示されたわけです。その

「葡萄の樹の根幹が私だ。神さまはこれを育ててくださる」

と、キリストは完全に農夫なる神にその全生命をお預けになった。また、それによって生きておられた。

2 おおよそ我にありて果を結ばぬ枝は、父これを除き、果を結ぶものは、いいよ果を結ばせん為に之を潔めたもう。

いいかげんな実ではない。本当の実が稔る。これが証人^{あかしびと}です。我々はその証人にされつつあるわけです。

●エン・クリスト

3 汝らは既に潔し、わが語りたる言に困りてなり。

この聖言が、私はちよつと始めは分からなかった。

「既に潔し、わが汝らに語りたる言によって」

語りたる言によつて既に潔しと。キリストの聖言は意味ではなかった、生命であつた。力である。生命であり力であるところのキリストの言は、

「わが言は靈なり生命なり」

と。靈である。ですから、

「わが語りたる言によりてなり」

とは、

「キリストの言は、これを受けとれば、直ちにそこで潔められた」

と、キリストはおっしゃっているわけです。受けとらなければ、しょうがない。聖言は、反発していたら、しょうがない。

「聖言を全身でもつて受けると、直ちにその世界に入ったんだ」

と。そういう事です。非常にズレのない世界です、この福音の本当の現実は。だから、

「私に居なさい。我に居れ。私に宿つて居ろ。私はお宿だよ」

という。「メネイン」というギリシヤ語です。英語でいうと「リメイン」(remain)。ドイツ語で、「ブライベン」(bleiben) という。



4 我に居れ、さらば我なんじらに居らん。

相互関係で一緒にいる。

「お前は私の中、私はお前の中」

という、パウロが散々言うところの

「エン・クリスト」

です。

●多くの果を結ぶべし

枝もし樹に居らずば、自ら果を結ぶこと能^{あた}わぬごとく、汝らも我に居らずばまた然り。

居れば実を結ぶが、居らなければどんなに力んでもダメだと。

5 我は葡萄の樹、なんじらは枝なり。人もし我におり、我また彼におらば、多くの果を結ぶべし。

同じことをまた繰り返しておつしやつた。

汝ら我を離るれば、何事も為し能わず。

これは、

「汝ら我に居らば、願いは何事でもできるぞ」

と、プラスの方に読みたい。勉強でも仕事でも何でも、キリストに居るならば、み力によつて、み智慧によつてできていく。これはもう生命の連なりですから。

「もし、居なければ、捨てられて投げられて火に焼かれてしまう。もう用がないんだ」と。

7 汝らもし我に居り、わが言なんじらに居らば

我に居るという事とわが言に居るといふのは同じことです。わが業に居るでもいい。

何にても望^{したが}に随いて求めよ、然らば成らん。

キリストの中で祈っている。キリストの中に入られて祈っている世界は、我利我欲の世界でないから、御意にしたがった祈りになって、必ず成っていく。こういうことはいかなる哲学も言うことができない。神の言ですから、神の現実ですから。世の中の、歴史の上でゴタゴタゴタやっているのは、要するにこの世界から皆ずれてしまっているから。それは事実が証明している。また、この世界に入っている人の、その生命は、生涯は、何と素晴らしい証になっているか。これも事実が証明している。

●わが愛に居れ

では、「居る」ということはどういうことなのか。ただ場所的に居ることなんだろうか。その次の言葉がそのことを言っている。



9 父の我を愛し給ひしごとく、我も汝らを愛したり、わが愛に居れ。

居るということは、「愛に居る」ということ。生命の質は愛なんです。愛がない生命は、何年生きようが、少しもそれは本当の生命ではない。愛の生命の中に入っていれば、一日で、これでもう永遠である。愛は滅びない。9節は非常に大事な節です。

「父の我を愛し給ひしごとく、我も汝らを愛したり、わが愛に居れ」

「今も愛しているよ、我が愛に居りなさい」

と。過去から、現在から未来にわたってであります。本当の現在は永遠の現在です。永遠は考えられたところの時間的な長さではない。質的なものです。滅びないものなんです。それが永遠です。我々はキリストにあつて永遠を活かされている。死を突破させられている。

10 なんじら若し、わが誠命をまもらば、我が愛におらん、我わが父の誠命を

守りて、その愛に居るがごとし。

キリストの新しい戒めは、その中心は何と言っても、愛です。パウロがコリント前書13章にちゃんとまつ先に書いている。このコリント前書13章は「福音の心臓」で、アルファでオメガです。あの信仰の使徒パウロが、いろいろな賜物^{たまもの}を頂いているパウロが、聖霊のことを単数で賜物と言っている所がある。

「これは他の賜物の土台になる賜物中の賜物なんだ」

と。しかし、また別な所では、愛のことだけは「カリス」「恩恵^{めぐみ}」と言っている。「カリスマータ」といえば、これは「賜物」ですが、愛は本当のカリス、恵みです。キリスト自身が恩恵の主体だから。

「主われを愛す、われ弱くとも、主は強ければ」

という、あの讃美歌は讃美歌のアルファでオメガです。

●愛の極みは十字架

戒めは、預言者エレミヤが

「新しき戒めを心の中にしるす」

と言った、これが愛の消息です。愛の極みは十字架であります。キリストの戒めは福音書に、またパウロを通して出ているが、これはみんな「…せよ」とか「…するな」とかおっしゃいますが、キリストは、

「私がさせてやるよ」

「そんな事はしないねえ」

と、そういう愛の御意をもつて後ろからちゃんと裏付けていくくださるところの戒めです。決して、新しいいいわゆる律法^{おきて}ではない。そのようにして、私たちは福音書を、またパウロの書簡を、ペテロもヨハネも読んで行きます。あり難くてしょうがない。

先生が生徒を指導するのも、この角度です。「なんだ怠けているではないか、もつと勉強しろ」



ではダメなんです。

「お前はこの科目が好きかね、よく親しんでくれ。大丈夫だ。点数なんか、偏差値なんか、そんな事は考えないでいい。みんな、神さまから賜っているところの大事な資質、また才能がある。落ちこぼれなんか一人もない。大学に行かなくていい。手仕事したかったら大いにしなさい。そして賜ったところを中心にしてお打ち込みなさい。そしたら、それに関係する科目も段々面白くなっていくよ」

と、私は校長の時にはつきり言いました。

「先生方はどうぞ、一人一人の特色をよく見て、そういう角度から指導してください。数学が嫌いな生徒にも、しかしこれだけの事は一番最低限だからと言って、そういう問題は必ず生徒に言ってお置きなさい。そして、試験に必ずその中の一つは出してやってください。それができたら決して落第点はやるな。あとは、中間のいろいろな問題、それから非常に才能のある者には応用問題、この三種類を出すこと。そして、好きな科目に対してはそれは是非、優をとるだけの力を注いで勉強するように、学ぶように言ってくれ。それぞれの特色が現れるようにしてください」

と。数学のできない、嫌いな者に、それで大いにやったら、その子の頂いている他の才能がみんな窒息してしまう。それぞれの特色を大いに現していけと。ところが、入学試験が、何か決まったような科目があるものだから、それでもって掣肘(せいぢゆう)（口出しをして、自由に行動させないこと）されてしまつて、なんとも本当の成長が歪められてしまう。日本の教育は困つたものだ。本当に哲人の文部大臣が出てきて、そういうところの根本的な改革をしなければダメなんだ。

●棄身の愛

12 わが誠命はこれなり、わが汝らを愛せしごとく互いに相愛せよ。

愛するとは助けること。人助けをすること。具体的であります。感情的に愛するのではない。もちろん、感情も伴うでしょう。けれども、具体的に人助けをする。その人助けの内容は、その時その時でいろいろであつて結構です。

塚本先生という方は、暖かいものを持つていらつしやつた方です。私はどの先生方にも感謝しています、それぞれの意味において。だから、

「第一巻を小池政美、内村鑑三、藤井武、塚本虎二、手嶋郁郎。この五つの星に捧げる」

と書いた。自分が本当にそれらの者を通して受けた恵みを私は感謝するからです。人がどうかではない。人に或る欠点があると、全的にその人を否定するようなことを言うような人があるが、人間というものはそんなことではない。



「欠点を暴くものはサタンであり、人の良きところを見るのが天使である」という言葉がある。マイナスのことをしていると、自分自身がマイナスになってしまう。審判^{さばき}とは、自分自身で招いているわけです。

この集会に来るのに、私は本当に最後の峠を乗り切った。7月の20日頃から10日間、完全にそこを乗り切りました。今までの私と違ったものが入ってきたから、内側が変貌したと言いました。その事を見たある人は「先生は光っている」と言いました。それで、皆さん、今度の集会は私は楽しいし、ありがたいし、みなさんがこのようにして交わって、福音を共に受けとってくださって、本当に何とも言えない。もう、言葉にならんし、筆にもならん。

¹³人その友のために己の生命を棄つる、之より大いなる愛はなし。

ヨハネ書第一書3章16節を、これと相応ずる言葉だと申し上げました。「生命を棄つる」ということは棄身の愛なんだ。棄身の愛で行けと。何も、そこで生命を棄てるということではないけれども。質的に棄身の愛でいけということ。棄身の愛をすると、上からまたキリストの愛が倍化してかかってくる。あなた方、経験してお分かりでしょ。

●我を見し者はキリストを見しなり

ヨハネ伝14章9節のところに、

「イエス言い給う『ピリポ、我かく久しく汝らと共に居りしに、我を知らぬか』」

(ヨハネ14・9)

「知らぬか」と言ったって頭ではない。

「私を本当に受けとっていないねえ」

ということ。ヘブライ語で「知る」という言葉は、全存在をもって相手を受けとることです。

「我を見し者は父を見しなり」

「私を見た者はお父さん、神さまを見たんだよ」

と。こんな事はキリストのほか誰も言えない。

神さまはどこにいるだろうか？ 福音書に来てください。ヨハネ伝のここを読んでくだ

さい。キリストに來なければ神さまは見えない。

ここに、河原撫子^{なでしこ}がある。

「我を見し者は太陽の光を、生命を見ているんだよ」

と、この撫子はそう言っている。撫子というのは、大和撫子というが、非常にへりくだりの姿だ。日本の女性を本当に表すのは撫子が最もふさわしい花の一つだと思います。

使徒ヨハネも、ペテロも、ヤコブもみんな

「我を見し者はキリストを見しなり」

と言いたような存在でありました。使徒行伝のペテロにしろ、パウロにしろ、本当に凄い。完全にキリストによって動かされている。



ひとつとでない。皆さんは聖書をお読みになって、

「皆これは私の事を、自分の事を言っているんだなあ」

と思って読んでください。「パウロは凄いなあ」ではない。

「そうだ、そうだ、私もその通りだ」

と、そういう根源現実を受けとりながら進んでください。そうしたら、知らない間に、段々凄いいことになって行く。三人称で書いてあるところは二人称として、自分に語りかけていることとして読む。聖書というのは一人称と二人称の世界です。形容詞がない。全部現在です。「…であろう」ではない。「…である」です。

もう、私は簡単になってしまった。だから、私はギリシヤ語、ヘブライ語の文法を破ったような翻訳を、もし時間があれば、したいくらいです。詩を書いたら後で、「アウス・マイン・レーベン」(自叙伝)を書くかも知れませんが、アウグスティヌスの『告白』のような。あるいは、詩の中にそれが多分織り込まれます、ある意味において。

●御霊の愛

「我なんじらを遺して孤児とはせず、汝らに来るなり。」(ヨハネ14・18)

「聖霊として来る」

ということですよ。

「私はもう十字架に架かってあちら側に行ってしまうけれども、孤児にはしない。

また来る。今度は、今までよりかもっと凄いい来方だ。今までは隣にいて一緒に御

飯を食べたが、今度はお前の中に入って一緒に食べるよ」

という世界。これが聖霊の世界です。まあ、福音の世界は自由自在です。

私は今ここに水を注ぎました。水は方円に従う。コップが丸いから丸くなる。四角ならば四角くなる。そして、溢れて行くような姿です。

ずうっと前に東北の癩病院に行つて、そこで癩病の方々に話をしたことがあった。普通は癩病患者との間に、話す所に溝があつてそっちに行けないようになってる。私はさつさと皆の間に入って、癩病患者に手を按いて祈つた。そんな人は今まで初めてだと院長が言った。御霊の愛が流れて行くから。御霊が来てから、私は一つもそういう事は恐らくなつてしまった。

アッシジのフランシスは、「あつ、あそこに癩病人がいた」と言つて、馬に乗っていたけれども、「嫌らしい」と言つて離れて進んで行つたところが、「これはいかん」と思い返した。戻つて来て、馬から下りて癩病人にキスをしたという。本当にキリストの愛です。

七月の終わりの十日間で私は内側が変貌させられた、と言つたでしょ。これは本当なんです。未だかつてない平安の中に、喜びの中に、光の中に入れられた。だから、

「主さま、あなたは我がみ光である。私を貫いて、どうぞあなたが輝いてください」



と、あの詩はそういう境地から出て来た。何も偉くなつたのでも何でもない。キリストの恩寵の世界だけです。

エレミヤ記5章6節に、

「故に林よりいづる獅子は彼らを殺し、アラバの狼はかれらを滅ぼし、豹はその町をねらう。ここよりいづる者はみな裂かるべし。そはその罪おおく、その背違はなはだしければなり。」（エレミヤ5・6）

という凄惨なことが書いてある。これをダンテが『神曲』の地獄篇の第一曲で援用しました。ダンテが山に登ろうと思つて行こうとしたところが、一番先に現れて来たのは豹だった。豹というのは肉欲の象徴です。それから狼、これは貪欲の象徴。獅子は傲慢の象徴です。この三つの獣が現れて、とうとう彼は山に登ることを断念して、踵を返して途方に暮れていたら、人か何か知らん影（ヴィルギリウス）が現れて、「お前は別の路を通れ」と言われる。そこで、ヴィルギリウスの案内で地獄を通つて行つた。地獄を通つて今度は煉獄に導かれて、煉獄の最後の所で今度は、ヴィルギリウスとバトンタッチしたのがベアトリーチェです。そして、天界へ昇つて行つたという。あれがダンテの詩です。

ところが、この三つの獣はもう私を塞ぐことができなくなつた。聖霊は私の導者です。私ははつきり、これに勝つて進んで行くことができるようになりました。もし、先生が躓いたら、あなた方は私から絶交していいよ。ベアトリーチェでも、フリーデリケでもない。私には聖霊だけです。私が今まで読んだ世界のどの詩人とも違う。主さま、有り難うございました。

●キリスト直結

とにかく、このヨハネ伝の14章から17章までは大変なところです。キリストのお別れの最後の言葉のところ、14章から21章までは福音書の最高のところでしょうね。

「助主、即ちわが名にありて父の遣したもう聖霊は、汝らに万の事をおしえ、

又すべて我が汝らに言いしことを思い出さしむべし。」（ヨハネ14・26）

「福音書を読めるようになるのは、この聖霊が来てからだよ」

ということ。本当に私はそうでしたね。

「聖霊の最初の名は愛である」

とトマス・アクィナスが言いましたが、最初にして最後の名、アルファにしてオメガなる名です。

「我は初めにして終わりなり」

という。

「主さまー」

と言えば、もう、言葉がないんです、

「アーメン、ハレルヤ！」



しか。

私はパウロの言葉を頂けば「罪びとの首^{かしら}」です。けれども、このしょうがない者をどこまでも棄てないで

「お前を使うぞ」

といって、キリストは、1940年から躓いたり転んだり滑ったり倒れたりしている私を起こしながら、前進してやまず、使ってくださいました。

「人間小池を見れば躓くよ」

なんて、私は幾度も言いました。けれども、私が与えられているものは本ものだから、それは言わざるを得ない。

「もし、私が立派でなければ福音を説いてはいけないというなら、即刻辞める」

と言いました。私は先生でも何でもありません。ただ先に生まれたというなら先生だけれども。あなた方は本当の兄弟姉妹です。私には恋人がありません、兄弟姉妹だけです。それでやっと本当に詩が書けるようになる。

「我誠に汝らに告ぐ、我が去るは汝らに益なり。我れ往かば助け主を汝らに遣

わさん。」（ヨハネ16・7）

と、キリストは言われた。私はキリストでないから、この聖言をそのまま使うわけにはいきません。けれども、もうあなた方はみんな本当にキリスト直結でもってどしどし進める。私は今までただお手伝いを、ちょっと道案内みたいなことをしただけのはなしです。しかし、私はどの一頁も頭で書きませんでした。

パウロのロマ書7章と8章は私の中にどっちも本当にあった。けれども、ロマ書7章は乗り越えた。8章だけになった。有り難うございます。もちろん、私は自分が立派だなんて言っているのではない。

「生来の私はこんなものだ」

とパウロが正直に告白している。しかし、もうパウロははつきりロマ書8章だけだったんです。

「十字架の他は何も語るまじと思う」

とまで言った。それが、本当に聖霊のことを各所でもって彼は語っている。この十字架・聖霊のパウロの有機体的構造は見誤まっではいかん。ヨハネはあまり十字架のことは言わない。

「罪を負う神の羔羊^{こひつじ}」

という言い方をしている。

●棄身の愛

それで、助け主、慰め主のみ力によって私たちは己が十字架を負っていく。棄身の愛が



十字架ということですが。ただ苦しみということではない。聖霊の内容はあまり凄くて、言葉にならん。

皆さん、人生というのはそれぞれいろんな事にまだこれからも出会う。いいですよ。その状況を、運命を、環境を変えようとするのは一つも要らん。十字架は、聖霊は必ず逆に力を加えられる。逆に力をくださる。私はもう体験で知ってますから。いろんな事にでつくわして来しました。その度毎に聖霊は私を強めてくださいました。聖霊はみ力をもつて働いてくださいました。私から聖霊をぬかしたら、それこそダメになる。

「また光栄と恥辱と悪名と美名とによりて表す。我らは人を惑わす者の如くなれども真、人に知られぬ者の如くなれども人に知られ、死なんとする者の如くなれども、視よ、生ける者、懲さるる者の如くなれども殺されず、憂うる者の如くなれども常に喜び、貧しき者の如くなれども多くの人を富ませ、何も有たぬ者の如くなれども凡ての物を有てり。」（コリント後6・8～10）

という、パウロの自在の境地です。コリント書簡というものは実にいろんな事が、本当に実に懇ろに書いてある。

●詩「エン・クリスト」

それで、また、新しい讃美歌を歌ってください。

A 52 「エン・クリスト」（1988年8月5日作 歌調 讃美歌315「浮世の荒波」）

1 「我こそまことの葡萄の樹なるぞ

わが父は農夫 汝れらは枝なり

2 汝れら我に居れ 我れも汝れらにぞ

然らば祈れよ 必ず成るべし

3 父我を愛す その如く我れは

汝らを愛す わが愛に居れよ！

4 わが愛の如く 汝らたがい

愛せよ助けよ 自由の律法なり」

5 主は我らのため 生命を棄てたり

愛の極みこそ 棄身の愛なれ

6 主の遣はし給う 聖霊助主

祈りに應えて み力を賜う

7 この世紀末の 危機の世界にて

我らはひたすら 聖霊の人たらん！

8 父御子聖霊の 一如の現実

我ら投身し 一つとせられぬ



天愛記之

●共歓同苦

キリストが、サマリアの女と井戸ばたで会話しました。水汲みにサマリアの女がやって来た。キリストはその時に、

「私も喉が渴いた。その水をおくれよ」

「あなたはユダヤ人のくせに、サマリア人になぜそんなことをおっしゃるか」

仲が悪い間柄でしたからね。相手の求めている水、その水を「私にもくれよ」と。そうして、更に

「私がお前にやろうとしている水は、井戸の水を飲んでもまた渴くけれども、今度は渴かないよ」

「そんな水、どこからあなたは持つて来たか」

面白いね、あの会話は。

「いや、その水を飲めば、お前のお腹の中から真清水が、生命の水が溢れてしょうがないよ」

と。何の事か分からないんだな。

そのように、本当の愛は相手の立場に自分を下ろして、そこから相手を担い上げて救いの世界にもっていく。高所から叫ぶのではない。これが本当の同情ということなんです。「ミットライデン」(Mitleiden)、共歓同苦という。同じ苦しみ悲しみの中に自分を入れて、相手を喜びに変える。苦しみを楽しさに変える。これはイザヤ書35章に出ている。そういうようにして、キリストは片端から救われた。

福音書だけは、ポケットに入れて、本当に電車の中でもどこでも読みましょう。その世界に直ぐ入ってしまうから。

日本はマンガ文明だね。こんなことをしていたら滅びる。あなた方一人一人に日本の運命がかかっています。本当に、隣人をそのようにして愛してください。それは、必ず響きます。真の愛は必ず響きます。人間の魂は本ものにぶつかったら、必ず動くんです。あなた方は、そのような証者にされている。

●今日汝は我と偕にパラダイス

私は、来年から本当に一人旅をする。非常に極端なことを言うと、「一切の集会をしない」と言ってもいいくらいです。しかし、私は倒れるまで集会はいたしますけれども。もう小池をとおしてではない。キリスト直結で行ってください。もちろん、今あなた方はそうではないと言っているのではない。兄弟姉妹として、いくらでもお目にかかります。また時には集会をするかも知れません。東京では終わりまでやりますが、今度は私中心の集会でな



くしようと思っている。

「愛する者を鍛える」

と書簡の中にもある。

あなた方の今までの陰に陽にのご友情はもう言葉にならない。感謝いたします。今度の献金は全部、第十巻に使わせて頂きます。聖名のために。主さま、有り難うございます。最後の一言。ルカ伝23章43節、

「アメーン ソイ レゴ、

セーメロン メット エムー エセー エン トー パラデイソー」

「われ誠に汝に告ぐ、

今日、汝は我と偕にパラダイス」

十字架上の片一方の心碎けた盗賊が——彼は何をしたか知らん——

「せめても、覚えてください」

と。それに、キリストは

「お前は今日私と一緒にパラダイスだ！」

と。これが福音である。主さまから、私は毎日そう言って慰められながら、力づけられながら進んで行きたいと思います。そうして、隣人を誰でもパラダイスの中に入れて上げます。

「一緒にパラダイスに入りましょう」

と言います。地上がどんなに混沌としても、私たちの歩く所にパラダイスが展開して行く。有り難うございました。

● 祈り

贖い主、キリストさま！

1988年8月19日より21日に至るこの5回の集会、一人一人の司会者が魂を込めて執り成してくれました。しもべはこの主にある友情を、また、兄弟姉妹たち一人一人の友情を聖霊にあつて一つである——エペソ書にもあり、ヨハネ伝17章にもある——その一つの世界をこのようにして現じてくださって、有り難うございました。大交響楽となりました。有り難うございます。百花繚乱となりました。有り難うございます。

聖霊の御導きにより、十字架を胸の中にいただいて、そして、私たちは一人一人のつぴきならない路をこれから勇ましく進んで行きます。これは、如何なる人をも隣人として、この福音を証しせんがためです。あなたの愛を伝えんがためです。あなたの聖名が崇められんためです。有り難うございます。

しもべは言葉がありません。本当にただ聖名を讃美し感謝し、これからの生涯を通して、いよいよ証人にさせられただけであります。有り難うございます。先に往ったところのキリスト教界の先輩たち、目に浮かんできます。その後を追って、しもべも進ませていた



できます。

あなたの新天新地、ヨハネ黙示録の大希望に向かって、私たちは進んで行きます。

「御国を来たらせたまえ」

という、その

「御国は私たちの間にある」

とキリストがおっしゃいました。その御国がやがて本当に来ること、大希望です。与えられたる大希望です。それに向かって私たちは進んで行きます。有り難うございます。熾くなるかな、この福音は。有り難うございます。

主イエス・キリストの聖名を全身をもつて兄弟姉妹たちと共に誉め讃え奉る。アーメン！

